

みんぱく創設 50 周年記念特別展  
「民具のミカタ博覧会—見つけて、みつめて、知恵の素」  
関連シンポジウム

# Doing TSUNEICHI 『忘れられた日本人』を問い直す

## 要 旨 集

日時： 2025 年 4 月 13 日（日） 13:20～

開催方法：対面・オンライン

対面会場：国立民族学博物館

主催 国立民族学博物館

共催 国立歴史民俗博物館「フィールドサイエンスの再統合と地域文化の創発」・現代民俗学会



## 開催趣旨

近年、宮本常一の『忘れられた日本人』が再び読まれている。民衆の持ち伝えた歴史への真摯なまなざしに立脚し、人間が人間らしく生きる最前線として「生活」を位置付け、フィールドで出会う人々との関わりから問いを起こすのが宮本民俗学である。それが存分に発揮された『忘れられた日本人』が名著とされる背景にあるのは、現代における地域のありようをもう一度足元から見つめ直そうとする機運や、宮本の社会実践的な学問の態度に学ぼうとする、再評価の視点である。

『忘れられた日本人』は、確かに読むたびに何かを得るような名著である。一方でそれが出版された 1960 年前後、そしてこの本が読まれていった 1960 年代、1970 年代の同時代において、本書は実際どのようにとらえられていたのだろうか。それを読み解くことは、今回の特別展「民具のミカタ博覧会」で紹介する、EEM コレクションとムサビ・コレクションが収集された時代を考える重要なヒントとなる。

本シンポジウムは、武蔵野美術大学市ヶ谷キャンパスを拠点に断続的に進められてきた『忘れられた日本人』の読書会「Doing TSUNEICHI」の議論をベースに企画する。本読書会は、『忘れられた日本人』を基点とし、身近な歴史や地域文化をみずからの課題として協働的に歴史叙述・文化実践を進める、パブリック・ヒストリー、パブリック・フォークロアの問題を議論する緩やかな研究会である。

名著として神話化するのではなく、より時代の中にもう一度埋め込んで再考し、現代の人文学の公共性の議論と、ミュージアムのコレクションの意義について考える材料としたい。

## プログラム

総合司会 河村友佳子 (国立民族学博物館)

- 13 : 20～13 : 25 開会あいさつおよび趣旨説明  
加藤幸治 (武蔵野美術大学 教授)
- 13 : 25～13 : 55 宮本常一が若者たちに求めた **Doing** の現代性  
加藤幸治 (武蔵野美術大学 教授)
- 13 : 55～14 : 25 同時代の批判から再考する『忘れられた日本人』  
—劇作家秋元松代との、〈みえない緊張関係〉をめぐって—  
北條勝貴 (上智大学 教授)
- 14 : 25～14 : 55 民話採訪の実践性と『忘れられた日本人』成立の背景  
山川志典 (武蔵野美術大学 非常勤講師)
- 14 : 55～15 : 10 休憩
- 15 : 10～15 : 20 コメント 小谷竜介 (文化財防災センター 統括リーダー)
- 15 : 20～16 : 20 パネルディスカッション  
「Doing TSUNEICHI 宮本常一から歴史実践を問い直す」  
コーディネーター 加藤幸治  
パネラー 日高真吾 北條勝貴、山川志典、小谷竜介
- 16 : 20～16 : 25 閉会挨拶 日高真吾(国立民族学博物館 教授)

## 宮本常一が若者たちに求めた Doing の現代性

加藤幸治(武蔵野美術大学)

本特別展で紹介する武蔵野美術大学所蔵の日本の民具の基幹コレクションとなっているのは、「旅する巨人」と称された民俗学者の宮本常一が主宰した武蔵野美術大学生生活文化研究会と、宮本が所長をつとめた近畿日本ツーリスト日本観光文化研究所（以下、観文研）が収集した資料である。

高度経済成長期の日本は、ディスカバージャパンに代表されるように人々が日本文化の多様性や、文化の土着的な側面に目を向けた時代であった。しかし当時の観光の主流は有名なスポットをめぐる、お膳立てされた団体旅行が主流であった。旅とは本来、みずからの問題関心を探究しながら自己研鑽するような厳しいものであり、また旅人はその土地の生活者では気が付かないような魅力や大切な何かに光をあてるような存在でもある。そのような思想のもと宮本常一が若者たちに期待したのは、旅の文化を担う良き旅人の実践であった。

観文研の活動の柱の一つが「民族文化博物館」を1975年に東京に開館するための全国規模の民具収集であった。修学旅行で多くの若者が地方を旅するにあたり、その旅をより良きものとするため、博物館が構想されたのである。残念ながらオイルショックなどの要因から博物館建設は頓挫し、民具はのちに武蔵野美術大学に寄贈されたが、フィールドワークと物質文化研究を組み合わせた独自の方法は、のちの地方文化の活性化や離島振興、民俗博物館建設など、幅広い観文研の活動のベースとなった。

また、観文研の活動のもう一つの柱が、雑誌『あるくみるきく』の刊行であった。雑誌『あるくみるきく』は1967年に創刊され、1988年の263号まで出版された（本展示では全号展示）。毎号、ひとつの特集を設定し、観文研の所員や同人の若者たちによる、自身のフィールドワークをもとに、地域の生活文化の見方、旅のあり方についての姿勢を伝え続けた。

1960～70年代、全国をみずからの問題意識で旅をしたのは観文研の若者たちだけではない。社会や体制への批判や絶望から、また理論的な闘争よりも生身を未知なる土地へと投じる旅を通じて思索を深めようとした、多くの若者たちによる旅による実践があった。彼らが手に取ったであろう本にはいくつかの時代を象徴する作品があるが、その一つが宮本常一の『忘れられた日本人』であり、彼が深く関与した『風土記日本』と『日本残酷物語』であった。旅人はさまざまな情報をその土地にもたらし、人々との対話によってそれが共有されていき、文化が育まれていく。そうした良き旅人を宮本常一は「世間師」と呼び、それを生涯をかけて実践する人々を師と仰ぎ、若者たちは「世間師」としての宮本常一を師と仰ぎ、その憧憬は『忘れられた日本人』の聖典化の土台となった。

本発表では、『忘れられた日本人』が刊行された1950年代後半から1970年の大阪万博へと至る時代の状況と、民衆の文化への眼差し、同時代の民俗学や美術をめぐる状況などに照らし合わせつつ概観したい。それによって、宮本常一が若者たちに求めた Doing の現代性が浮き彫りとなるであろう。

## 同時代の批判から再考する『忘れられた日本人』

—劇作家秋元松代との、〈みえない緊張関係〉をめぐって—

北條勝貴(上智大学教授)

宮本常一の遺したたくさんの民俗誌のうち、その文学性において白眉とされるのが、『忘れられた日本人』であることは言を俟たない。しかし、同書を生み出した彼の歴史実践は、例えばその方法である「聞書」「民話」についても、同時代のさまざまな作家、活動家、歴史学者たちとの交渉に発するものであった。その複雑なせめぎあいにおいては、当然のことながら未だ宮本は神話化されておらず、共感や敬意とともに疑惑や批判のまなざしを向けられていた。ともに「民話の会」へ参加していた森崎和江などは、たびたび依拠しつつも批判を込めて、宮本の営為について言及している。

そうした宮本をめぐる同時代の言説群、ネットワークのなかに、秋元松代（1911～2001）という劇作家・随筆家の姿があった。『常陸坊海尊』（1962）、『かさぶた式部考』（1969）、『七人みさき』（1975）といった主要作品は、伝承／現代の交差から世界を再構築する独特な手法を持ち、現在もときおり上演されるが、批評や研究の対象となることはまれである。しかし、民俗学、あるいは宮本常一との関係においてみると、彼女の生きざまや言説は、また異なる光彩を帯びる。彼女自身が柳田民俗学へ傾倒し、フィールドワークともいえる旅々に取材、時代・社会から抑圧・疎外された人びとの懊悩を描き出そうとしたからである。秋元の物語る対象・内容は、「土佐源氏」などの文学性に驚くほど近い。また秋元は、同じ旅人として菅江真澄に共鳴し、関連の紀行文や評伝を執筆しているが、周知のとおり宮本は、戦後真澄研究の基礎を作った人物でもある。

そう考えてゆくと、宮本／秋元の実践は密接に関わっていてもよさそうなものだが、しかし二人の交渉は意外なほど希薄である。また秋元の作品やエッセイには、直截的ではないものの、宮本や民俗学者一般への批判とともれる文言が散見される。例えば和田正洲によれば、あるとき宮本は某調査先での出来事について、「さる村を訪ねて、いろいろと尋ねていると、その家の年寄りが、この間もあんたと同じような人が来たよと言うんですよ。それはだれかと聞くと、菅江真澄という人だと言うんです。私は嬉しくなったねえ。真澄がこの間来たというんだから」と嬉し気に語ったという。数百年を飛び越える過去との近接性「この間」に反応したものだが、自分が真澄と重ね合わされたことが「嬉し」さの根底にあらう。秋元も、秋田雄物川の渡し場で「真澄を世話した」老人と遭遇しているが、その経験を綴る文章には感動はみえず、「たぶん紹介者から、私たちが菅江真澄について調べ歩いていることを知らされていたのだろう」「どうも東洋文庫か何かの解説を読んだ人からでも聞いたらしい話が混ざってくる」と手厳しい。

本報告では、秋元松代を中心とする同時代の言説、とくに女性の批判から『忘れられた日本人』を読みなおし、神話化の向こうにみえなくなりつつある等身大の宮本常一、その恣意性や作為、逡巡や葛藤について、少しでも光を当ててゆけたらと考える。

## 民話採訪の実践性と『忘れられた日本人』成立の背景

山川志典(武蔵野美術大学)

『忘れられた日本人』を、私たち読者は、一冊の本として手にする。しかし、この本は書き下ろしではなく、「年よりたち」という題で雑誌『民話』に連載された文章を中心に再構成されて一冊の本になっている。現在、宮本常一の代表作として知られるだけでなく、民俗学の名著としても扱われる『忘れられた日本人』が、どのような意図や経緯で刊行されたのか。これについては、木村哲也や岩田重則らの先行研究があるが、本発表ではそれらをふまえながら、「刊行当時の宮本常一にとって『忘れられた日本人』がどのような存在であったのか」という点に着目をしたい。

具体的な手がかりとするのは、『民話』に原稿が掲載され、『忘れられた日本人』が刊行された1958～1960年の間に宮本が記した日記である。宮本は、調査先・滞在先、出会った人、書いた原稿、時には時事や本・映画についての感想、さらには家族への思いなど、様々な内容を日記として残している。そこからは、まず、『民話』の刊行元である未来社や『民話』の編集委員とのやりとり、原稿をいつどこで書いたのかといった、『忘れられた日本人』が刊行されていくプロセスが浮かび上がってくる。さらに、渋沢敬三や家族への言及や、当時取り組んでいた『日本残酷物語』の刊行や博士号取得に向けての研究活動の様子からは、その時代を生きる宮本の姿がうかがえる。

ただ、この作業の先に辿り着きたいのは、『忘れられた日本人』の内容の検討や宮本のパーソナリティを知ることではない。『忘れられた日本人』の書かれ方や、宮本の調査や発表の姿勢から、「超人的な民俗学者・宮本常一」像を少しでも具体化・細分化し、歴史や文化を調べる実践へとつなげる糸口を見つけ出すことである。

そのため、加えて論点としたいのは、民話採訪という活動である。「民話」という言葉の意味する対象は広く多義的である。今日の日本の口承文芸研究では、「民話」は、昔話・伝説・世間話というジャンルを包括する「民間説話」とほぼ同意義で用いられることが多い。一方で、木下順二ら『民話』に関わった人びとがそうであるように、国民的歴史学運動の流れを受け、庶民／民衆／民族／国民の話指して「民話」と使われることもあった。このような「民話」の多義的な使われ方とその展開については、野村典彦、高畑早希、高田雅士ら多くの研究者によって論じられている。

本発表では、この「民話」の使われ方に留意をしながら、民俗学や口承文芸研究において民話採訪として実際になされてきたことや現状、さらに僭越ではあるが発表者の経験も交えながら、話を聞き集め、書き記し、読む、そして何かを創り出すことや行動へとつなげていくという行為のあり方について考えていきたい。

**M E M O**